

第196号

まちのくすりやさん

今回のおはなし



「アトピー性皮膚炎」



「電子たばこについて」



アトピー性皮膚炎

新薬続々 広がる治療の選択肢

かゆみを伴う湿疹に悩まされるアトピー性皮膚炎で、治療薬の選択肢が広がっています。ステロイドなどの塗り薬や飲み薬が主流でしたが、副作用の少ない内服薬や自分で簡単に扱える注射薬が相次いで登場しています。治療が困難な場合は、かかりつけ医に相談してみてください。

アトピー性皮膚炎の原因となるのが、細胞間の伝達物質でタンパク質のサイトカイン。その一種の IL-4、IL-13、IL-31 が体内で過剰に産出されると、他の細胞に働きかけ、炎症・かゆみ・皮膚のバリアー（防御）機能低下の3つの症状を引き起こします。

バリアー機能が落ちると、かゆみの元となるアレルギー物質が体内に入り込みやすくなるため、さらに症状が悪化します。かきむしって炎症がひどくなったり、イライラが募って不眠やうつにつながったりするなど、生活の質（QOL）に悪影響を及ぼします。

従来はステロイド薬や免疫抑制薬で炎症を抑える手法が一般的でした。2018年に保険適用になったのが、生物学的製剤「デュピルマブ」です。既存の治療で改善しない中等症以上の患者が対象になります。

2週間に1度、腹部や腕などに皮下注射し、IL-4、IL-13の動きを抑えることで炎症、皮膚バリアー機能の低下を防ぎます。初回は1本300mgを2本（計600mg）、以降は1本ずつになります。指導を受けて練習し、慣れれば自分で注射することもできます。器具は、病院でよく見かけるシリンジ型と扱いやすいペン型から選べるのも長所です。一方、JAK（ジャック）阻害薬という新しいタイプの飲み薬も注目されています。ここ数年で、「バリシチニブ」「ウパダシチニブ」「アブロシチニブ」の3種類が保険適用になっており、これらは IL-4、IL-13 にも有効とされています。いずれも既存の治療で、改善しない中等症以上の患者が対象で、「ウパダシチニブ」「アブロシチニブ」は、12歳から内服可能です。

これらの薬のメリットとして、ステロイドの副作用である糖尿病や高血圧などがみられない点が挙げられますが、それは、サイトカインの動きをピンポイントで抑制するためとなっています。

それぞれ副作用が全くないわけではありません。デュピルマブは、結膜炎、JAK 阻害薬は B 型肝炎などの感染症に注意が必要で、服薬前に検査が必要となります。

高額な薬剤でもあり、基本は塗り薬との併用で、かかりつけ医に相談してください。

電子タバコについて

香料などを含む溶液を電氣的に加熱し、発生させたエアロゾル(蒸気)を吸入する製品。日本ではニコチンを含むものは現在販売されていないが、ニコチンの有無にかかわらず、健康影響には懸念があると考えられる。

香料などを含んだリキッド(溶液)を加熱して、発生するエアロゾル(蒸気)を吸入する製品です。リキッドの主成分はプロピレングリコールやグリセリンなどのグリコール類で、食品添加物や医薬品などに使われているものですが、諸外国ではニコチンを含むものが流行しています。

わが国においては医薬品医療機器等法(薬機法)により、ニコチンを含むリキッドの販売には許可が必要です。

海外においては、ニコチンを含む電子たばこについて、紙巻たばこよりも健康影響が少ないという意見や、ニコチン入りの電子たばこの使用により紙巻たばこを中止させる効果があるという研究データが発表されています。その一方、不適切な使用あるいは幼小児の誤飲などによる事故や、10代への流行などが問題視されており、対応が検討されているところです。

なお、ニコチンの有無にかかわらず、電子たばこによっては、健康に影響を及ぼす可能性のあるホルムアルデヒド、アセトアルデヒドといった発がん性物質などを発生するものがあると報告されています。因果関係の有無を推定する科学的根拠はまだ不十分ですが、使用者本人にも周囲にも健康影響が生じうると考えられます。

(一社) 浦安市薬剤師会

〒279-0004 浦安市猫実1-2-5 健康センター内

Tel 047-355-6812 (月~金: 10~15時)

Fax 047-355-6810

メールアドレス yaku_ura_t@urayaku.jp

ホームページ <https://www.urayaku.jp/>